どうしん夢プロジェクト　広告企画

専門家に聞く“サンタの謎”

トナカイの素顔も明らかに

過去の資料・文献を検証

捜索活動を本格的に開始したどうしんサンタ捜索チーム。独自に収集したサンタに関する資料を、フィンランド、デンマークなど十数カ国の専門機関と連携して検証を進め、スタッフが現地を探索して数十人から証言を得るなど、丹念に裏付（ぼうしょう）を固めている。調査に協力している専門家や大学教授らの見解を聞いた。

「空飛ぶトナカイ」は、世界中のトナカイから、優れた身体能力を持つ8頭が選ばれたという

“サンタクロース学”の世界的な権威サリバン・ウィリアム博士は「サンタクロースにまつわる膨大な資料を読み込むと、サンタは実在する可能性が高い」と話す。世界中の学者が決定的な証拠が見付けられないのは、サンタが自らの存在をあいまいなものにしようと努力しているから。恐らく、子どもたちに夢や希望を忘れないでいてもらうためでしょう」と付け加える。

「学会では、トナカイが空を飛ぶという結論で合意しつつあります」と話すのは、日本動物園協会に所属するある学者の一人。サンタクロースの存在を証明するのに欠かせない“空飛ぶトナカイ”の調査に力を注いできた人物だ。「サンタと行動を共にするトナカイは、カナダに生息しているペアリーカリブー種という森トナカイが有力。彼らは並外れて強靭（きょうじん）なアキレスけんと飛行に適した身体能力を備えており、この優れた身体構造によって空を飛べるとされています。その中でも優秀な8頭がサンタに選ばれたと考えられます」

相対性理論の立場から研究に取り組んでいるのが、アイスランドの物理学者ライナー・ギュスタフ博士。彼は「サンタが一晩で世界中の子どもたちの家を回れるのはなぜか」という難解なテーマに挑戦してきた。その結論は「サンタが北極にあるブラックホールから、莫大（ばくだい）なエネルギーを引き出していると仮定すれば可能」という専門的な内容を含むものだが、これらはサンタ存在説を裏付ける証拠といえる。ライナー氏は、サンタが世界各国にプレゼントを配るために要する時間が約3万分の1秒であることも、トナカイのスピードなどの計算から導き出している。

Vol.5

「想像力と愛情によって解明されるべき問題」

日本のサンタ研究の第一人者である北海道文化芸術総合大学のA教授も、サンタの存在説を唱える一人だ。「信じられないようなことが起こった時、人はそれを『奇跡』と呼びます。子どもたちはサンタが実在することを知っています。しかし、多くの人は大人になるにつれて、奇跡というものを信じなくなってしまう」と述べ、「サンタはいるという絶対的な証拠は見つかっていないが、いないという証拠も同じく見つかっていない。いるかどうか分からないのに、いないと断定している」と「サンタ不在説」を主張する研究者に苦言を呈した。さらに「本来、サンタの秘密とは子どもたちとコミュニケーションをとるすべての大人各自の想像力と愛情によって解明されるべき問題だと思います。私の答えは、子どもたちにサンタの話をしてあげる大人の数だけ、サンタクロースは存在するというものです」と語った。

親しき仲に「サプライズ」を

北欧に見るプレゼントの習慣

贈り方一つでより深い思い出に

子どもだけでなく、大人にとっても「クリスマスプレゼント」は特別なもの。サンタクロースからプレゼントをもらうことはなくなっても、誰かに「贈りたい」という気持ちが、年を重ねるごとに強くなってはいないだろうか。そんな大人に提案したいのが、身近な人にとってオンリーワンのサンタクロースになることである。そのためには、プレゼントの内容はもちろんだが、渡し方にも工夫を凝らしたい。

歴史をひもとくと、オランダやドイツ、スウェーデンをはじめとする北欧諸国のクリスマス伝統文化に「ユール・クラップ」というものがある。これは、友人や親戚の家を回ってドアをノックし、玄関先にプレゼントを置いて帰って来るという習慣。誰が贈り主かは決して明かしてはいけないという決まりがある。多くの場合、プレゼントの包みにメモを貼り、そこに中身を予想させるヒントを書いておく。クリスマス当日まで、中身を想像しながらドキドキ、ワクワクする楽しみも一緒に贈っているのだろう。包みをほどいたときには、その内容から贈り主が分かるかもしれないし、すぐに分からなくても贈り主を想像する楽しみがある。また、北欧では「実り」を表す木の実の形をしたクッキーを手作りし、プレゼントと一緒に置いてくるのだとか。手作りクッキーの味で、「今年もあのおばさんからプレゼントだ」とヒントになるかも。クリスマス当日には、各家庭でプレゼントを開けながら驚きと喜びの歓声が上がるという。そこには、誰から贈られた品物かを想像しながらプレゼントの包みを開封する楽しみと、それを使う喜びがある。

贈る心もプレゼント

ちなみに、スウェーデン語でユールは「クリスマス」、クラップは「たたく」を意味する。クリスマスシーズンにドアをノックする音が聞こえたら、プレゼントがやってきた知らせだ。贈り主の正体が不明という点ではサンタクロースと同じと考えられる。そのため、この方法は贈られる人をワクワクさせることができる渡し方といえる。ユール・クラップは、誰もがサンタクロースになれるすてきな習慣だ。いつものように、顔を見合わせて贈るのもいいが、こうした「サプライズ」も大いに喜ばれるだろう。

サンタクロースは12月24日から25日にかけて全世界の「よい子」にプレゼントを届け終わらなければならないのだから、例え飛行速度が時速3万キロでも、世界中を飛び回るのは大変な仕事だ。もしかするとサンタクロースと同じと考えられる。そのため、この方法は贈られる人をワクワクさせることができる渡し方といえる。ユール・クラップは、誰もがサンタクロースになれるすてきな習慣だ。いつものように、顔を見合わせて贈るのもいいが、こうした「サプライズ」も大いに喜ばれるだろう。

サンタWEB 23日公開

懸命の捜索活動を全国に配信

昨年度の「サンタ捜索WEB」ページ

「サンタクロースの行方を一緒に追ってほしい――」。どうしんサンタ捜索チームは、今年も「サンタ特設WEB」を12月23日午後5時に公開する予定と発表した。世界中の子どもたちの夢と希望をかなえようという「どうしん夢プロジェクト」の一環で、想像上の人物と考えられているサンタクロースが実在するかどうかを、クリスマス当日にリアルタイムで確認するため準備を進めてきた。担当者は「昨年はあと一歩というところで取り逃がした。今年こそサンタクロースの正体に迫り、多くの人と発見する喜びを共有したい」と意気込んでいる。

このWEBページはサンタの動きが活発化する23日～25日の午後5時から深夜1時に限定して公開。昨年度は、トナカイの位置情報をキャッチする「トナカイレーダー」や、サンタ目撃情報が寄せられたさっぽろテレビ塔や札幌市街を見渡せる場所に設置した「ライブカメラ」の様子などを紹介する。今年は設備を増強し、レーダーの大幅改良を行い超小型化に成功したほか、音速並みの動きも捉えることが可能なライブカメラを導入するという。さらに、ツイッターやフェイスブックといったSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）と連動し、読者からのサンタ目撃情報やクリスマスの思い出も紹介することで、サンタの動向を多方面から追求する構えだ。

どうしん夢プロジェクト サンタ捜索 特設Web

北海道新聞社ホームページでは、このバナーから閲覧可能

一緒に見守って　担当者が呼び掛け

「サンタ特設WEB」のアドレスはhttp://adv.hokkaido-np.co.jp/santa2011/を入力して直接アクセスするか、北海道新聞社ホームページからも閲覧可能。クリスマスの思い出はツイッターでハッシュタグ「#doshinsanta」を付けて投稿できる。

「今年の目標は、サンタの証拠をしっかりと捉え全世界に発信すること。読者の皆さんからの投稿が大きな手掛かりとなることもあるので、クリスマス当日はぜひ一緒にこのWEBを見守ってほしい」と、担当者は強い口調でその意気込みを語った。

企画制作／北海道新聞社広告局

この広告企画はお子様と楽しんでいただくため、夢のある構成となっています。フィクションを多く含みますがご理解、ご了承願います。

次回は12月25日(日)朝刊予定

大きなもみの木に、夢を託して。

～生木クリスマスツリー秘話～

美しい輝きで人々を笑顔にする「サッポロファクトリージャンボクリスマスツリー」

クリスマスに欠かせないアイテムの一つがクリスマスツリーだ。日本では、プラスチック製のツリーを飾ることが多いが、西欧では生木を使って飾られる。北海道で、生木ツリーを出荷しているのが、十勝管内・広尾町だ。同町ではツリーに適したトドマツや赤エゾマツ、黒エゾマツを生育。本物のツリーならではのよさと、広尾サンタランドの理念「愛と平和 感謝と奉仕」の心を、日本全国の人々に伝えている。

札幌市内で、同町のツリーを見られる場所の一つが「サッポロファクトリー」だ。同施設は広尾町の生木ツリーを毎年導入しており、今年で19回目を迎える。今年は、樹齢約40年、高さ約15㍍、重さ約3㌧の巨大なトドマツで、屋内ツリーとしては国内最大級の大きさ。「家庭的で温かみのあるデコレーション」をテーマに、赤とゴールドを基本色とし、約3万5000個の電飾にボールやリボンなどのオーナメントで仕上げた。

同施設の担当者によると、広尾町のツリーを導入する理由は「国内唯一のサンタランドからのすてきなツリーを多くのお客様に見てもらいたいとのこと。毎年9月ごろ、同施設の担当者が足を運び、ツリーにふさわしい木を選定。そこから木の周辺を囲ってクレーンでつり、保護材で覆って札幌まで運ぶという。大変な作業だが担当者は笑顔で答える。「このツリーで夢をお届けできるのが幸せ。北海道ならではのスケールの大きさと美しい様子をさまざまな場所で伝えていきたい」。

求ム！クリスマスの思い出

どうしんサンタ捜索チーム［12月23日から］
詳しくはhttp://adv.hokkaido-np.co.jp/santa2011/まで

（C）北海道新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。